



教育文化プランナー



関 祐幸

秋田県 J A あきた北 総務部 部長

せき・ゆうこう／1994年6月、J A 田代町（当時）に入組。1996年からは3農協が合併し発足した、あきた北農業協同組合の営農部生産資材課に配属。以降、支店での購買渉外、グリーンセンター、生活部生活課、共済課、監査室長等を経て、2023年3月から現職。

総務部長として、内部統制やリスク管理、生活指導、人事、介護事業などの業務に携わる関部長。30年以上にわたり、さまざまな仕事に従事されてきた経験を生かし、工夫を凝らした教育文化活動を展開しています。なかでもJ A への理解促進や活動が活発な女性部や「ちゃぐりん農園」に関する取り組みについて、また、それらの課題をお聞きしました。

■ 地域の人から農業を教わった

——関部長は、1994年に旧 J A 田代町に入組以来、合併をはさんで、J A のさまざまな部署で業務に携わってこられました。農業の経験がないなかで組合員との関わりをどのようにつくってききましたか。

前職はN E C の関連会社でプログラマーをしていましたが、バブル崩壊で会社が倒産し、地元の田代町に戻ってきました。その年の6月にJ A 田代町が採用募集をしていたため応募し、採用されました。前職の経験をもとに採用となったと後で聞きました。その後合併によってJ A あきた北となり営農部生産資材課の購

買担当に配属されました。これも後に上司から「農業についての経験をたくさん積んでほしいから、総務部じゃなくて営農部にしたんだよ」と言われました。もともと非農家出身で、農業の経験はほぼなく、母の実家の稲作の手伝いや父の実家の家庭菜園ぐらいで、知識についても素人同然でした。そんな現場を知らない私を組合員が田んぼに連れて行き、稲の病気「いもち病」特有の症状である楕円形の斑点を見せ教えてくれました。そのおかげで、組合員から相談されたときは「楕円形の斑点はでていませんか」「それはいもち病ですね」と的確な薬剤を紹介できるようになりました。

営農部の時代は組合員とたくさんつながり、農業を教えてもらう良い経験を積むことができました。

共通の目標を持つ人々が協力し、農家から職員へ、職員から農家へといろいろな経験を伝えながらつないでいくことで、よりよいJAを築いていくことができると思います。

■ 農業・JAを理解してもらいたい

——地域住民に参加を呼び掛けた教育文化セミナーを開催しています。それに至るまでの経緯をお聞かせください。

現在、女性部員の減少が顕著です。新型コロナウイルスの流行によって、さらに追い打ちをかけられました。支部では高齢化により活動に参加できない部員が増えているほか、支部解散の話もあります。また、管内の町内会が解散したところもあります。

しかし、地域とJAをつなぐ場を途絶えさせてはいけません。そのためには既存事業の現状維持・継続やコロナ禍が明けて休止していた活動を再開するだけではなく、農業・JAへの理解者を増やし、JAとの新たな関係性を築くための架け橋となる教育文化活動を地域住民へ展開することが必要です。

その布石として昨年、地域住民に向けた教育文化セミナーを開催しました。農業研究者の篠原信さんを講師にお呼びし、「今の日本の生産量で何人食べられる



女性部の自給菜園コンクールの活動が定着している



直売所「旬菜館」の周年祭で青年部員と子どもたちが交流

のか」という食料自給率のテーマで講演いただきました。

現在の日本は野菜や米などの食料を輸入に頼っており、消費者は国産農畜産物よりも安い外国産を選んでしまっています。このままでは日本の農家は減っていくばかりです。輸入ばかりに頼っていると、いざ輸入ができなくなったとき、国内生産量のみでは日本の人口分の食料をまかなうことができません。輸入品に比べたら高いかもしれないけれど、なぜ国産農畜産物を選んで選ぶことが大切なのかを消費者に理解してもらうことが必要です。

今回のテーマにはおおいに興味を持っていただき、200人ほどの参加者が集まりました。これからも教育文化セミナーを開催することで地域の方々に食や農の大切さを伝え、JAの役割について理解してもらえるように努めていきたいと考えています。



教育文化セミナーを開催し、多くの地域住民が参加した

■子どもたちに食農体験のよい機会を

——JAあきた北では「ちゃぐりん農園」に力を入れています。これに対する想いや、これから取り組みたいことをお聞かせください。

「ちゃぐりん農園」は、子どもたちにとって農業や食について理解を深められる貴重な機会だと思っています。毎回20名ほどの子どもが参加してくれています。農業や食に深い興味を持ってくれており、JAのお兄さんになりたい、将来農家になりたいという声もあります。

しかし、最近は少子化で小学校のクラブ活動が低年齢化しているため、「ちゃぐりん農園」に参加してくれる子どもたちが減少しています。

「ちゃぐりん農園」での元気な笑顔に癒やされますし、送られてくる感謝状には



「ちゃぐりん農園」では、リンゴの収穫体験が好評



アスパラガスの選果を体験している子どもたち

役職員一同、喜んでいきます。引き続き子どもたちが参加したいと感じてくれるように地域に呼びかけをし、女性部と協力して企画していきたいと思っています。

■活発な女性部活動と頼もしい部員たち

—— J A あきた北では女性部の活動も盛んです。女性部の方との関わりの中でのエピソードや、これからの活動への想いをお聞かせください。

女性部員のみなさんは団結力が強く、チャレンジ精神が旺盛なメンバーばかりです。生活部時代は共同購入で女性部と関わりましたが、力強さを感じました。現在も、「ちゃぐりん農園」や J A 家の光大会などの運営には、女性部長が率先して動いてくれています。

J A 家の光大会は毎年1000人近くが集うほど大規模で、女性部員が寸劇を演じていました。しかし、大会自体、新型コロナウイルスの流行によって数年間中止にせざるを得ず、ようやく昨年度に開催することができました。コロナ前と同じ規模ではできず、寸劇もできなかったのですが800人ほどの参加者が集まりました。

女性部長を筆頭に団結して、J A 家の光大会だけではなく、そのほかの活動についても復活させる動きをしています。

■協同組合の理念を伝えていきたい

——最後に J A 全体の課題やこれからの目標、伝えたいことを教えてください。

J A は株式会社ではなく、組合員のための組織です。J A と組合員、地域とのつながりを絶やさず、相互扶助の組織であることを忘れずにいたいものです。私自身、J A 綱領の1つ目にある「地域の農業を振興し、わが国の食と緑と水を守ろう」を一番大切にして業務に取り組んでいます。しかし、J A が組合員のための相互扶助組織であることを理解できていない職員が増えていたり、組合員とのつながりも希薄になってきたりしているのは、全国の多くの J A が抱えている課題ではないでしょうか。若手の職員にも協同組合の理念を大切にして業務に携わるように教育していくことが必要と感じています。



女性部員が J A 家の光大会のカルチャー発表で日ごろの練習の成果を披露



寄せ植えの体験など、女性大学で仲間づくりを進めている